遞信省認可

いらつめ第六十二號目次（明治廿三年七月二十日）

●文藝美術…午睡美人（唱歌）
縹狂太郎＝山本鷲醒＝松乃＝奥野保橘＝後樂散士＝飛縞子＝竹下山人＝紅花＝柳巷＝春眠散史＝蘆野潤三郎＝横山ひろ子＝撫箏女史＝菊之舍露子＝本吉みは子＝伊藤曉子＝碧溪散史＝菊野清
○賴朝の墓……美妙齋主人
○月前水鷄……竹屋雅子
○泉……佐々木光子
○泉……石渡忍子
○泉……伊藤琴子
○泉……金子錠子
○夕顔……大橋時子
○氷室……大生靜子
○夏花……富田愛子
○朝鳥……杉里子
○山……高野むら子
○深山鳥……中村慶子
○鎌倉紀行……綠梅子
○親なし子……蟹の家
○戸隱山紀行……美妙齋主人

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二拾九錢郵稅共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵稅共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵稅共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵稅共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六拾五錢郵稅共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵稅共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事〇府内に限り無郵稅〇毎月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれは妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第五十八號至第六十七號十部版權所有

明治廿三年七月十九日印刷　一　明治廿三年七月二十日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町拾番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本號には　午睡美人の唱歌　賴朝の墓（美妙子）　十淑女の和歌　竹屋雅子　月前水鷄　前號續きの鎌倉紀行及親なし子　戸隱山紀行

次號には　コレラ預防法　ペルシヤ風俗　其他種々の面白きことが出て居ます

文藝美術

第二十三回懸賞文藝應募得點

題　午睡美人

○唱歌

（イ）　稱狂 宋郎（イセ）

青柳のいとあをき日に
午睡して夜半にそゞく
まどろめず胸いたまする
ゆかしさよ。

（ロ）　仝　上

菅の根のあをき春の日に
やすく＼と午睡してゐる
たをやめのこぼるゝばかりな
まことの美ゆかしき寐顔に
くもりなき君は魂ハ
いま何處をさまよひゐるぞ。あゝ
情人さみの未來の脊と
手をかはし睦みかたりて、イブ
ンの園に
いなく＼いイな。
いな君がむすぶ夢ハ我
等えてれしそかられず。

評　調子が不整でそ。語法て一派です。

（ハ）　山本 蕃圜（ナゴノ）

朱をかゝげし珠すだれ
うちに横ふ玉すがた。
まがきの花も恥らはん、
いとたをやうに見ゆるあり。
ゆふべ君のいつくしさ
うけしぞ人に知られける。
寐ねしその身に纏ひつる
錦の衣こそまるしあれ。
夏の夜のみじかき爲か、
糸竹のしらべにつかれしか、
そよふく風に身をまかせ、
蝴蝶は夢をぞ結ぶなる。
枕の上に照る日さへ
心ありげに斜にて
そのたをやかに映じつゝ
又一入にうつくしゝ。

評　王昌齡の未央殿前月輪高の趣意を取った處はいゝですが修辭が拙です。

（ニ）　松　乃（イヘロ）

やなぎの眉毛月はかほ
こき瑠璃色のあらひ髪
鼻元すゞし春のはだ
金剛石と口は中
くちびるかげに見ゆる齒の
主のこゝろぞいま夢路。

以上四曲無賞

（ホ）　奥野 保稿（ロサカ）

宿鳥を襲ふふくろふは
ひめもす枝に眠るとか。
されば晝ねるこの少女
鋭き爪は持たねども
心の刺は如何あらん。

（ヘ）　仝　上

泥はうちよりぬけ出でゝ
濁りにそまぬ蓮さへ
露をば玉と欺むくと
あやか知りえん人ごゝろ。
まして浮きたる川竹に
流れを汲める浮れ女の
晝寐のたくみ恐ろしや。

（ト）　後樂 散士（ハナ）

夏の眞午はなつさそば
青葉かり寐のさまくらに
忘るゝ夢の面影は
春のなさ日に白玉の

露けごのさしと咲きに匂ふ　花の色こそ寫るあれ。

さくら（ナ）　飛　綿　子（トケイ）

櫻か薔薇のうるはしく　露とばふくむその寐姿の
匂ひぬばかり色ふかし。
結べる夢てうつゞばしく　蝴蝶となりて花なる人ハ
たどりて見たき心地せる。
花としいへとはあふれど　光蔭をそて丶萎るゝ花
つる牽牛花のなやむはあ。

評　艶でハあるごの脉絡ごの亂れてゐます。

（リ）　竹下　山人（シフマン）

まあひる涼しき池はかせ　玉たれはいとまだるれど
盛りは花はいとやそく　あまつ乙女ハ夢は鄕。
風は流れにうくこてふ　うつりにまどひ亂るとも
はあれをとめハ窓は下　たれしき夢路たどるあり。
草木はうらみいとまさん　よはれみむそふ花はつゝ
いまハまひるにるをやめは　夢さる眉にしたゝれば。
宿にかげうすき庭松に　操まけじとはこる花、
吹く夏風ようちしそれ　いとゞまさりてうるはしそ。

夢路よあそぶ花をとめ　惠みは露は光りてく
くさ木まどそすそは姿　飛ぶ鳥さへも羽をとめむ。

やあぎ（ヌ）　紅　花（イセ）

柳はねむるやさそゞのた　鶯さあくそのすそに
迷ふ人々あさましや　風にあびけどをれさるぞ。
春は千種のいろたえて、　緣の中に香と放つ
牡丹の花もいかゞせん　主あるもののときゝつれば。

評　少佳。

霞ハこむる遠山は　眉のすがたもうらめしや。
まちかにあれど程遠く　思ひかよはぬ我身あハ。

評　大佳。

（ル）　柳　雪（トケイ）

ゆあみもそへぬ、浴衣をまとふ、　こゝちよし。
簀子をしけよ、團扇をおこせ、　すみやかに。
あそびゆかん、いさかの國に　まてしばし。
すゞしき座敷むゝへよこゝに　華胥のくに。
うかゞひ見れそひとりの乙女　やさをとめ。
うしろにまへにひだりにみぎに　うつくしよ。

以上七曲第四等賞

（ヲ）　春眠　散史（ノナホ）

てる日は光高やかに　野邊は草木も萎るあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

翠色濃き木は下蔭を
愛でつゝ夢に彼の國に
失れならなくに白玉は
かすむる風を高樓に
遊ぶをがたいはあ菖蒲
露重げあるをゑへし。

蘆野潤三郎(イヘシロ)

(ソ)

讀むべきふみもよみさてね。
くち木のぞしりうけぬとも
暫しいもるせゝりねして
をとめごゝろのやさしさよ。
たちぬふ王ざもあしはてね。
學ひれまぜれそゝ風よ
戀しきはゝのもめやゑん。

許　あだめいた美人を出させ、しはらしい美人を出した處の價値のあるです。

(カ)

髮もおぜろに白たへの
打もふしたりたをやめは
はだもあらそにまひるごろ
憇れつかれのあやめるか。

横山ひろ子(ヒロカ)

梅か香かよふ窓の月
袖をまくらにたをやめは
はころび初しくれあるの
もるゝ月をも閉さすべし。
見ゆるはいまぞゞねてより
夢もまパもきまひるごろ
打もねふれるおもかげは
花もとづべく雲間より
ゑまひれかほれ折り〳〵よ
思ふ人をや夢に見つらむ。

撫琴　女史(ミノ)

(ヨ)

玉のかんパせ月のまも
ねむるそのたれもうのしさよ。
美といふもれゝいと高價き
自然にまかせたをやめの
これぞまことの世のあうの
れこそとこそは云ふべけれ。

花もはぢぬるたれやめは
自然にまかすねすがたの

許　天眞爛熳。

さざとよそひしゑのはより
もかしさいとゝまさるなり。

菊之舍露子(ナカサカ)

(タ)

ねむる姿もたをやえと
あつをわするゝこゝちして
高床の上にたをやめの
みやにあとえし海棠か
見ゆるは眞のもきれとだ
あつき日のげもなはそゝし。
ひるねすがたはもろこしれ
それかあふぬかうつくしゝ。

柳　雀(トゥナイ)

(レ)

おどろ〳〵となる神も
あでりをゝしむ白玉て
おちくる櫻はとかしさに
ひぢをまくらの一ねふり。
やさしくあらぶ双の眉
とくるパうりは白き肌
かるく合ふ口高き鼻
夢にはたれとかたるらむ。
はや遠山は雲の中、
軒端をはあれ五つ六つ
知らず〳〵も乙女子は
蝶にたとへん？蝶もあし。
雪よたとへん？雪もあし。
風せる姿はあてやかさ、

(ソ)

蟬のきるてふ薄衣、
遠きても見ゆる雪のとだ。
い、い、い、い、
すぎみしてふをえたひつゝ
はる〳〵華胥は國さして

仝　上

また、るはぜの水團扇、
夕立後はそゝりせよ
おくられつゝも乙女子が
むすぶ夢こそもかしけれ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

以上七曲第三等賞

風かをる夏木立（ツ）
日影をさけし袖とぞはらふ。
夢の手枕置きそへし
と飛びちがふ一番
端居のゆめの姿にまとふ。
夢の浮橋路をかよふ（チ）
結びあまりし短夜の
玉なす露のひるもなは
絶えし方なる窓の下
支へ兼ねたるたをやめが
ふりつけられし蓮の花
草もえとるゝまひるごろ
吹けども去らぬ暑さをぞ
世にも優しきさとやめが
枕にかふる臂の杖
閨に残して誰ともに（ナ）

春眠　散史（ハナ）

青葉がくれにそよ／＼と
あゝ美くし！
其面影にかゝる黒髪。
真午の光りにひら／＼と
あゝ麗はし！
寐顔に色彩る花の色。

本吉みは子（カロガ）

夢やうからん青柳の
涼しき糸のならべだに
花の顔玉の臂
うたゝねむりの夕立に
ふせるさまこそゆかしけれ。
たのみ少なき夏風の
さけなんとてか若竹の
蝉の羽衣身にかろく
つきぬながめの姿のみ
夢のうき橋たどるらん。

伊東　曉子（イロ）

あらがねもとくるとかきく夏の日の　あつさをよそに水の面　うつらふかげもすゞしげに　かけつらねたる青すだれ、涼の世にさと吹きかへす　内やゆかしきいねすがのた。　まとへる蝉の羽衣も　おもげに見ゆるたをやめのうちはに半ば隠れし　花の面をみせじとや　へだつる小簾のよくげなる。（フ）

よしの簾のひまもりて　すゞしき風のかをるあり。
りねにせかれしきぬ／＼に　みのこすゆめをや　むすぶらん。

碧溪　閑史（ナカ）

来るやとまちてあかしゝか。　うれしくあふて寐ざりしゝ。
そハいつれともえぞしらぬ　とにもかくにもたゞならぬ。

評　前半ハ好いが後半がうちつけ過ぎてゐます。（ム）

菊野　清（イメラキ）

我物と思へバかろし笠の雪、　それならなくに夏の日の
蝉のはごろもいとかろく　いもが門邊におとなへば
けふハあるじハよそにとや　いふひも絶えて中庭の
筧の水の音のみす。　しをり戸あけてうち入れば
げにことわりや文机に　かゝりてねむる花薔薇
蝴蝶のゆめや結ぶらん。　その夢破るも興なしと
妹がかたへによりそへて、　暫し見とるゝ花のかほ
無邪氣にねむるしほらしさ。　匂ひこぼるゝ黒髪の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

みだれかゝりし其ひたひ
越路の雪の白たへの
肌への色の涼しさよ
夏はなつさもわすられぬ。
二人が中をむらさきれ
色こき契りよあづらひて
式部の日記おくりしが
机の上にひらかれて
ねしれ目ざめを待ちゐるれ
これぞわが身のこゝろなり。
呼びさまさんれ易けれど
そのいね顔もいとをしや。
いとしとおもふまごゝろよ
いもがかひなを膝にのせ、
其細ろ指とにぎりしむ。
時しもゆ先や破れけむ、
かたみよ見合れそ顔とかは。
思はずいねしわか姿
君に見られて恥かしと
袖うちおほふ愛らしさ。
君きませしと夢見艸
嬉しとおもへば目覺ぬと
語りし言葉れ身にしみて
世のうき事もわすれ草
いともうれしくおもはれぬ。

以上五曲第二等賞

頼朝の墓

美妙齋主人

「ますらをや空しかるべきよろづ代にかたり繼ぐべき名はたたずして。」　さても阿房の煙が雄圖れ名殘り、果は香魂を劍の影に飛ばせるばかりか？　今たづねて來て見れば、星月夜鎌倉山には草一面、君が雨露の恩に浴しておびかぬ風は無いと云ッた、昔の跡そもそもいづこ？　朱ぬりの社、四十間四面れ廻廊、むかし居並んぞ侍どもの貔貅數百、萬馬吶喊の号令に皺嗄れた咽喉の唱歌よ鞍坪を叩いて節くれ立ッた手の皷、鶴が岡八幡の社頭に吉野山の殘ンの櫻とへし打ッて來く世は靜御前とはさても奸雄！　もとは唐棣の蔭に生へた枝、それおごら權威の嵐よ吹きたしなめて、而も六十餘洲れ覇業をたゞ三寸の掌よ握りつめ、終よ蕭牆の禍と思はず。社頭の石段ゐれ今も血よまがふ葉末の露をしたゝふして、荒法師の潜んだ銀杏の樹が影くらく千秋の無念を籠めて居るやうな。　あゝこゝで公曉が妬さの刄、目釘を嚙んで三世の榮華の根を絶ッたか？　社頭の篝火花を散らして突きさゞぐッた唸り聲は永眠の耳に入らなかッたものか？　七百年の今月今日、はか無いものは世の成り行き、昔おごらの物とては梢を拂ふ松の風と由比が濱邊に打つ浪の音ぞかり。　八町四方の御殿の跡へ豆を植ゑる畑と爲り果てゝ、なゝこれ土の中れどれかゞ曾て大頭の足にも觸れたか知らぬ、其墓はと問へばそもへ浮世、山ふところよ殘る五輪が名殘り、　苔さびて山の露常にうるほふ、そもそもこの下よ爾來七百年間の覇業が埋ッて居る事かと思ふと言ふのも夢心地。墓の邊の青木の色は緑、椿の花の春はくれなゐ、槇れ大木の陰は闇黒、　それら木々はいつまでの何を守護する氣か？

さらでだに　いのちは　脆き　もの　と　聞く。

それ　時めきし　かげも　無き

世こそ ひとしは つれなけれ
いはをも 裂きし もれゝふの
こぶしも いまは いはの かげ、
ふミよぢりたる なそくさも
いまは かしらの うへに生ふ。
涙の 音 ばかり ひゞしよて。
つきは 今日 まで まどかなり。

ひ

月前水鶏　　竹屋雅子

日頃ふりつる雨名残なう晴れて、ふく風いと涼しう心地よきに 親しき友のもとよりこよひ音づれんといひおこせしかば、いと嬉しくて夕くれよりやり水のわたりかき拂はせなど何くれとまうけしてまつほど、月高くさしのぼりて軒深くさしいりたるに若竹のおきふしなびく葉影など繪にもかゝまほしげなり。 折から門の戸はとく〳〵と打ちたゝく音するはまつ人のきつるならんとやをら立出でみれば、せどのわたりよてくひなの鳴きゐるなりけり。 わらぬ事ながらさそがよいつしのと待ちつるかひに門近く

きなく水鶏をきゝえつるかな

泉　　佐々木光子

わきいづる泉の水はいつみてもいつむすびても涼しかりけり

同　　石渡忍子

暑けさをやうて忘れていと清水むすべるほどは夏としもなし

同　　伊藤琴子

夏の日のあつさながるゝ岩清水むすばで見るも涼しかりけり

同　　金子錠子

松かげの岩井の清水立ちよりてむすべば秋のかせのよふなり

夕顔　　大橋時子

賤が住む柴の袖垣なつかしく咲きかゝりたるゆふかほのはな

氷室　　大生靜子

なつきても更に夏なきこゝちしてやまかせ寒きひむろ山かな

夏花　　富田愛子

わきつ羽の袖もわつしとわぶる日に涼しくさける雲の下かな

朝鳥　　杉里子

朝つく日のぼらんとする山のはに聲もわけゆく村がらすかな

山　　高野むら子

雲間よりぬけ出にけりものゝふのさけてくたちのさやの中山

深山鳥　　中村慶子

おく山のいはのかけ道こえゆけば見なれぬ鳥のこゑぞ聞ゆる

鎌倉紀行(二)　　みどりうめ

第二　汽車

やうやくれふとで乗り移つたのも中等室は一つ、乗つたばかりでまだ腰も掛けぬにもう車も回轉を初めました。其速力が次第に増して來た時分——丁度品川沖は見える頃汽車は窓から東の方を見れば、どんよりと曇つた空は間から顏を出した大陽、さもねむさうに品海に手をさしのべて顏を洗つて居る風情。　出來ることなら寐氣ざましに薄雲を搔むしつて遣りたい樣でした。

これまでも互に無言で居たけれ〳〵も思はず——大陽の顏を拜んだ爲め——一言二言の談話を初めました。　談話と言つても天氣は事ばかり。　世間の噂談も互ひに好まぬ性質。自然無言になり勝ちでした。

今更云ふまでもなければ汽車の回轉も早いもので瞬たする間に八里の路を走つて、汽笛の聲を放つ途端、車の回轉も止みました。　止まつた場所も即ち横濱の停車場!

汽車を下りて驛夫に問へば下り列車の出るまでも凡そ一時間餘の猶豫があるとの事。「降らせ照らせの好天氣で、其上時間があります故横濱の町を御散歩なさいませんか?」と言つたは虛言。　實は是非一度見て置きたい私は志願。が、幸ひに承諾されたから自分の望みも叶つて横濱見物となりました。

第三　横濱

なか〳〵宏大な家もある。　が、別に感心したものは一つもなく、見たい〳〵と望んで居た横濱は斯んな所かと初めて覺りました。　早く言つたら東京の築地、たゞそれより近つて居るのは日本の古物を賣る支那人の商家ばかりでした。一体は町の樣子も東京とあまり變つた處もない樣な。　それも遽かに降り出した雨凌ぎに茶屋へ驅込んで思はず時刻を移した爲め委しく見なかつたせいかも知れない。

雨も降る、時間は逼る、胸も躍る、何とも角とも云へない心地。　かて〻加へて私は非常な感じを與へたのは美妙氏の獨言。「先へ行つても斯う降られては迚も調べもれおんぞ出來た話ではない」。

更らに空を眺めて復一言、今度は私に向ひ、

「あまり降るやうでも行つても駄目ぢやら……」

「歸ると仰るの?」直に私が應じました。

「さうでそ」。　力無ささうな返事。

旅と云ッたら國から東京へ出て來た計りの私、それも幼少時分の事。　漸く物心附いた今日では爲なれぬ乍らも爲て見たいも旅!　それを切角是迄來ながら見そ〳〵歸るとは。

思へば自分も出來る丈け辨護して美妙氏の心を飜へさうと務めました。　勿論美妙氏とて行きたい心も私と同じ事。私の言葉を說破しあかつたもたゞ其弱さが有ればこそ。

兎角する中に雨は霽れました。　雨が霽れたも何よりの幸ひ、空の模樣も何うでも構はず、もう斯うなれば何が降らうと覺悟は前。　勇み立つて茶店を出たのは午前十時廿分——丁度發車の十分前でした。

親なし子

雪廼家

其 中 愁容去つて怡顏來る

今は彌生の頃と過ぎて早や卯月のはじめとなり、此方彼方の樹と見るに殘花一片の影もなく、而して若葉の緑既に濃く稍々繁つて居ます。 宵越しの雨は細かに降ッて實に陰鬱な天氣です。 山は朦朧として見え分ぬぞ。 錢の樣な小やかな蓮の葉浮ぶ池は一杯に水を湛へて泳ぐ緋鯉は列をなし、雨を得意に鳴く蛙の聲、檐端の雫の音共に寂びて聽えます。 一間の書齋廣くはないが掃除能く行屆いて清潔です。 美しい唐机は窓に向ッて据置れ、筆硯など秩然と備ッてゐます。 阿清は此の幽凄な書齋の中に垂れ籠めて物思はしさうに庭を眺めて居ました。 池の右手の小高き所には芍藥の白き、薔薇の紅き花。 池の向ふから此方に突き出た汀一面に植られた杜若早咲の花五つ六つ。 その總ての花が雨に惱んだ風情は又一層の見榮ですが此の花に對しても心を慰むることは出來なくッて亡母や又行先の知れぬ父上の事を思ひ起しました。 阿清は立ッて書棚の上より一箇の手文庫を取り出したが、此れは母上の紀念の品、思はず太く吐息して蓋を開くに裡には古き書面の數々、親戚から送る安產見舞のもの、朋友から寄せた時候見舞のもの、或は當時の日記など取り廣げるに付けて思ひ起す母上存生の時の事胸まづ塞がり眼には早やくも涙の玉を浮べました。 ふと庫の底から出たのは一通の短冊で「寄菖蒲懷舊」と題してある。

うけてたに思ひやはせしあやめ草永き別れの紀念なれども

墨濃やかに記した筆の跡正しく亡母の吟したものだらうと手に取りあげ、頬に押當て眼を閉ぢたが、やがて短冊を膝の上に置きヂッと見詰めて思はずパラ〳〵と涙を其上に落しました。 唯これ許りではなく床に掛けたる書幅は父上が丹精を凝して書かれた「緑陰清話」の圖。 書棚に充滿した父上が秘藏の書籍なども何れも涙の種でないものはありません。 阿清が心は彼を思ひ此を思へば我にもあらぬ茫然として障子の棧を見つめて居た。 此時下女の阿鍋は隔ての襖を細目に開き、

祖母さんが彼方でお呼びでござります」

「アノお孃さん。

「さう……」

極めて冷淡に答へたが少し調子をゆるめて、

「今直に行くから、――併し何んだらう？」

立ち歸り行く下女の後姿を眺めつゝ愁然と遺物の手文庫と元の所に直し、和歌の短冊一通は机上にあッた新聞紙の間に挿み、之を携へまして急々と祖母の居間に行きました。

「お祖母さんどうも根氣よく降りますねエ」

「おゝ清……如何にも鬱陶敷い天氣だなア。 餘り退屈だから今鍋に賴んでお茶を煮させたからお前一つお上りな。 鍋や昨日山川さんから頂戴した榮太樓の煉羊羹がそこに在

るうら出して……夫れはカステラだー。 それ傍あれー」
「お祖母さんエアノ母上さんの手文庫を見ましたらこれ」
新聞れ内から以前の短冊を取り出しまして祖母の前ゐ置き
ました。
「この短冊がありましたよ。 これ歌と御覧なさいよー」
祖母ハおッと一目。 もや涙を催しました。 これハこれ
世ゐ亡き嫁御、愛らしい孫の母親の遺物の一品。悲を起すも
無理あらぬことでそ。
「清や能く之を見付けたなう。 こりやお前の母上さんの
書いた歌だ……おのき別れれりたみあれども……遂永き別
とあッた南無貞譽妙光大姉南無阿彌陀佛阿彌陀佛。
「お祖母さんエ」
祖母と孫顔見合ハせて目に涙、阿清ハ思ハず身を振ふせて
祖母の膝下に伏してわッと咽び入りました。 祖母も赤落る
涙を押し拭ひ、
「清や、これお清や……これさ……」
跡ハ口籠ッて一言も出ず。傍に居た下女のお鍋も二人の嘆
きゐ貰ひ泣き、其座ゐ堪へず勝手の方に行きました。やかて
祖母ハ泣き顔をかくして、
「清やお起きよ。 これ羊羹を御食りよ」
「あいれ祖母さん難有う、 お鍋お前此所へ御出でよす」
「はい難有うござります。 アノ御隱居さま急須がさめま
したやうですが入れ換へましやうかし。
「左樣よ夫れぢや鐵瓶ハよく煮えて居るだらうす、それを
差してお呉れ。」
これよりハ主從三人いと睦しう世間の咄しであつさが稍々
少時經て阿清ハ獨り言葉あく頭を垂れて又も物思ひと始めま
した。今その心の裡を解剖それバ、お祖母さんに何時りよ
く聽かうと思つて居るハ母上存世の時の事、今日ハ不圖した
ことから話の緒も出て居るうら今日を幸に聽りして貰らうの
知らん。併しお祖母さんが話して呉れるだらうかしら、又
妾が泣くりら夫と見るがいやで話さあいだらう。どがお祖
母さんも泣くが多分話して聽して呉れるだらう。妾が母上
の事だものと。おう屹度話すだらう左樣だ左樣だ、と問つ答
つして居る胸れ中思案に思案を重ねれば自づと胸で鼓をうち
始めました。 顔にかゝる鬢のおくれ毛を輕く搔き上げ、上
目で祖母の容子を伺ひましたが常に變らぬ溫和の相。我が孫
の憂を憂とする体であッた。
「お祖母さんエ。 アノ何にと」
「何んだエ清や」。
「今日どうか母上れ事を話してお呉あさいあ。」
「母上の……お前夫を聽て何んゐするの」
「何んにするッて母上の事ですもの。 妾聽きたうござい
ます。」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

「左樣聽きたいのかへ。　夫れぢや話さうよ。　佛も嘸喜こぶだらう。」

くるしき胸に咳一聲。

「母上さんの名ハ阿秀とて松本蘿月といふ漢方醫の惣領娘幼稚の折能書の學高く成長の後ハ讀書その他の文藝一通り裁縫ハ申すまでもなく熟達し田舍ょ珍らしい女であッた。十八の時人を以て無理に所望し漸く此の家に迎ひ入れて、嫁御の披露その性質正直温順であれぞ我が家の和睦繁昌の基と喜び四隣合壁の人までハほこり顏、噂好の人々にも終に一度嫁御の善惡言ハれしことなく二十五の時にお前を產みしが產後もいと健うであッたが其の後四年を經て二十八才の秋不圖風邪の心地にて枕ょ就きしが初めであッた。　手を換へ品を換へ種々の醫藥も盡したけれどもその効見えずその翌年二月二日然かもお前が五つの時に歸らぬ冥府へ旅立ち……今際の折の遺言にも『清が行末も見ずょ死ぬのか殘念よ。　彼の子の行末賴みます程に何分宜しう唯賴む清が身の上、之が今際の願よ』と繰り返して曰ッた言葉がまだ耳に殘ッてゐる。　だからお前も母上さんの遺言を堅く覺えて此の後とも必ず〳〵立派な婦人になッて吳れよ。

祖母ハ淚で物語れば阿淸も亦淚で聽てゐました。

「お祖母さんェ妾ハよく母上さんやお祖母さんの言ふことと聽きますワ。

「おゝよく聽き分けて吳れたな。　母上さんが淨土でさぞ〳〵喜んで居るだらうよ。　折角學校でも精出して、天晴れな婦人になるのが淨土の母上さんへの孝行といふものだよ。　清やこの道理を聽分けてな。」

祖母と阿淸の兩人ハ愁然として空うち仰げバ時しも北の空より南に飛び行く子規の聲次第々々に遠く血に叫ぶ餘聲ハ向ふ青葉の山にありましたが又も此の子規の聲に喚び起されたのハ父上の身の上です。　父上ハ今ハ何處の浦で濤の音よ夢結ぶやら、何所の驛路に子規の啼音聽て故鄕のこと一人の親一人の子のこと思ひ出で我等と同しく淚に袖を濡すやら、併し命ょさはりはないだらうと繰り返しつゝ、窓と開て急と向ふを見れば雨とも厭はぬ郵便配夫、

「へい郵便です。」

阿淸ハ襦袢の袖に双の瞼を拭ひ、塞らせた鼻とすゝりつゝそつとそれ書狀と取り上げ見るに表ハ慥かに望月なは殿と記し裏書ハ

清國上海米租界第百三十號旅館に於て

望月閑亭

阿淸ハ一讀して覺えず、

「お祖母さんェお祖母さん」

と日頃に似合ハぬとんきような調子、

「淸や何んだへ。　何處からのお手紙だ」

「何所つてあの父上さんが上海から」
「何に父上さんの手紙？」
二人は茫然――今迄の嘆は何所にか消え失せて涙に影もない。
凡て喜の最極点に達すれば不思儀にも笑ふ聲もなく、亦喜びの顔色も見えぬもの。二人は只夢の心地で幾度となく父の手紙を繰り返しつゝ讀みました。

✿ ✿ ✿ ＊ ＊ ＊ ✿

戸隠山紀行（一）

美妙齋主人

去年の夏信濃國戸隠山に遊び、其日記を書くつもりで居て終に果さゞ、思ひ至れば既に今日で殆んど一年。山に對しては紀行を誓つた、それ諸共其日を記臆するため心覺えの中から列ねて、この夏期漫遊を計る人にも入れまた餘り行かぬ此山の名勝を知らせる所存、引きつゞいて是から暫時此處へのせます。

耶馬溪の奇は實見せぬ事とて何とも云へず、妙義の勝は成る程勝、しかし戸隠山に比べれば猶規摸は小さい處が恨です。戸隠の名は紅葉狩の故事から縁を引いて今日も人が聞く、聞いてそれで見た人は却つて少ない、夫には原因も有る事です。何を言ふにも信越のほとんど一境、長野からさへ五里の險阻、と越えなければ行かれぬ、是が一つ。それに有名な險阻な山、一度遊んだものが懲々して驚いて其危險と唱道する、是が一つ。つまりは第一の原因が都城の人足を隔てたわけで、第二が信濃人とさへ威した處です。信濃、而も長野の人で猶戸隠を見ぬ人が頗る有る、それで其險も分かります。長野へ着いた其夕ぐれ、福武氏に逢つて戸隠の話しと聞けば險阻は險阻ながら見る價値は充分あるとの事、福武氏は嘗て一度遊んだ事が有つて山嶹麥れ味も忘れられぬとか同行しやうとの言葉、聞く身も勇み立ちました。之を人に話すと矢張り長野の柴田氏も贊成しました。けれど三四日間は大雨で出立も出來ず、空しく天と恨むばかり。それでなくとも戸隠は雨の多い山で、道の泥濘は無類との事、まづ白河法皇を極めて空しく日を暮らしてゐました。時に七月十五日、午後から不思儀に雲切を見付けた其嬉しさ、まだ晴雨何れとも決せぬもれゝ早晴れさゝ心持ち、前日來の雨で道は無うし損じた事と思ッたもれゝ、夫を顧りみる處でなく、翌日は晴雨に拘らず、無論濡れるは覺悟、泥布子を着るれは必定、夫ながら朝立ちして向うと相談一決し、翌朝と契ッて其夜は床に付いた物の、目を覺ませば山嵐も點滴とおやまたれて、田の蛙のなく聲も雨を呼ぶかと胸はとつおいつ、いつか起されて見ればわ、戸隠大明神！ 東の嶺の端しら〳〵晃いて、朝霧の薄紗が朝日山の額と包み、風靜かに、空玉子色正に好天氣の瑞は現はれました。朝まだ四時、既に柴田氏に訪はれました。顔を洗つたか、洗はぬか、は全く夢中、單衣にくゝりつけた高袴、脚半と足袋とで足をし光てそして前夜用意した日和下駄を穿ッた打扮は登山に似合はぬ打扮と人さ轉げて笑ふばかり。生來山越は靴で無ければ下駄、其外は不得手な私、よしや黒鐵の岩角でも踏み碎いて進まうものをと氣ばかりは半ば拔けて山へ馳せました。柴田氏は單衣の着流しに脚半草鞋がけ、福武氏も單衣に高袴は脚半草鞋がけ、何れも身輕な打扮でした。金剛杖に象る蝙蝠つきたて、用意整ッていざと計りに出立しました。長野町の人家まだ起きず買ひ立ての樫齒音高く響いて、而も朝開の風ゝろとも涼しさう。徃生寺山に差掛る内爪先は次第に上ッて其谷を經た頃は最早一起一伏すこしも定まらぬ峠となッさ、此處を何と聞けば其處に聳えるのが大嵓山との事でした。

この大峰山は有名な松茸山で、如何さま見上げた處松といふ木の外には土ばかり。山はざら光いた土で松には適しさう。之を左右に送り迎へてれ一里ばかりはまことに唯れ山、是と言ふ興もなければ是といふ不興もなく、同行三人無駄口を木たまに響かせて罪もない途傍の甘艸又は釣鐘草の花とつまんでむしるばかり。果は高わらひに驚いて飛び立つ雲雀が二つ三つ。顧りみれば長野にわッて見上げた朝日山やまた今まで高いと思ッた大峯山も山途の常、次第に低くなり果て、經には記標に見えた絶頂の松が地平線に嚙まれて行く体。夜は充分に明け離れて山れ端を隈取る旭日の色もほんのり紅く、此日の天氣いよ〳〵頼もしくありました。行き行く内に荒安といふ處にかゝる。掛ッたところで際立ッたのは道が樂に爲ッた事でした。むかし翔鸞上人が大峰山からこゝまで來る時、道の險阻に弱り果てやうやく荒安まで來て「なら安」と其道は樂になッたのを喜んだと云ふ、それが故事で今日も其處を荒安と名付けさとか。今は――婦人小供にはや、六か

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しいもの丶――夫程の道でもなく、むかしこのやうで親鸞が
さう言つゝ物ならば實よ上人ハ飛んだ弱虫、三里の灸を勸告
しても宜からうと一向が飛んだ空威張。
　道端よ一軒ばかり淋しさうよ設けた茶店に立ち寄ッて見晴
らしのいゝ椽鼻から遠くを望めば今までの山中に引かへ更へ天
がのまるで切り開けたやう、山ハ遠近にうねッて思ひ／＼の色、
中よ一際遠く見える一脉ハ猶あまたの雪を戴せて居る、あれ
ハ何山と尋ねれば飛彈の國境との答へ、あゝ飛彈が見える處
までもう來たかと思はず感じもしました。腰に帶びた望遠
鏡を取り出した柴田氏ハ頻りに吾々どもを見回はすのと村の
り見が見て羨ましがる。「飛彈の山よ蠅が居る」と威して
渡せば眞面目で望遠鏡の鏡の面にとまッた蠅よ歎かれて居る
をかしさ。
　休息所を立ち出ていくらも行かぬ内次第々々に天氣が惡く
なり始め、遠山の根方ハ切れて居るもの、頭の上よハ雲足が
低くなりました。　幸に涼しさハ涼しさ、然し苦勞も苦勞。
聞える難所よやがてさし掛ッて降られたら何程の不都合でし
やう。が、雲足の低れた割りにハ容易に雨も來ず、冲々に
送られてぱつ／＼と足を運びました。路ハ一起一伏やとり
定まらず、而もやうやく一間前後の上り下り、左右ハ或ハ林
或ハ谷、人家も折り／＼思ひ出したやうよ一二軒なるばかり
頗る氣候ハ下界と變はッたと見えて時々見える麥畑の麥ハ猶
青味を帶びて、春も低く、而も芬ッてハありませんでした。
見るからが變ッた心持ち。道を傍つて流れる溪流の透き徹る
までに美しいのに立ち去りかね、はんけちを浸して汗あせを拭
ッてゐる內よ落ち合ッた二人の男、是れも旅よそはひでした。
最早人界に遠ざかッて中々ゐ人ハ戀しく、言葉とかければ先
方も應答しました。　これら二人ハ丹波島のものとか、鶯の
雛を戸隱山に取りよ行くとか、矢張り朝立ちして出て來たの
でした。　何を携へるかと思ふと別にそれらしいものも無く、
就て鶯の事と話せばなる程黒人でした。　戸隱にハ以前鶯の
中々澤山であッたところ近頃取り盡して大に少なくなり大に
よわるとの愚痴。誰が取り盡したと問ひかへせば「私等さ」
と言ッて呵々と白らう其質朴!
　小一里の道をこれらと一途にして、　一行すべて五人、面白
をかしく思はず道と捗取りました。　やがて其内林の中に突
然と鶯が見えたとか、「それ居た」と言ふより早く二人ハ林よ
飛ひ入ると、さても草の深さ、身ハ早沒して仕舞ひました。
心よい田舍の人の道づれもこゝよ無くなりました。　人の鋼
釣り、見て隙をつぶすのも詰らぬ嘶し、其儘袂を分かッて彼

是四五町、何と言ふか名ハ忘れましたが山繭など道傍に多く
居る、山中の一軒家を遙のに望んで右を迂回し、左をまはり、
行き着いて見れば是ハ如何よ、前の二人ハ既よ其處ふ腰を掛
けてゐました。
　最早一日け馴染互よ言葉を掛け合ッて吾々も其處に腰を掛
け、さて其家を見回すと、何が無し目よ入ッたのハ獵銃でし
た。　獵師のと問へば齒の拔けた皺がれ聲の老婆が「さい」と
答へる。　途端見れば見馴れぬ吾々の姿に寄ッて來たれハ例
の日本種の狐めいた、瘦がれた狗、主よ獵よ用ゐる類でした。
差し出す山茶ハ色ばかり。よく有る事、烟草盆に取り入れた
火ハ爐の燃えさしで、取るや否や一服つけさせたのを御役濟
ふして直さま消えて仕舞ひました。　獵についての事を話し
のゝても兎角老婆の話しも火同樣、答へるだけで直く消える
ばかり。前の二人の鶯取りとハ傍で聞いて更に分からぬ應答
を高聲で、饒舌りましゝ。要するに前の二人ハ常に鶯を取り
に來て、こゝの家とも既に入懇。われ／＼ハ一足さきに袂を
分かちました。　この間見るものは山、一つ越せばまた山。
空も山で支へられ、地面も山で固めてありました。で、や
ゝ珍らしい心持ちのしたのハ是からが即ち信濃で有名の原、
飯縄ヶ原にかゝるのでした。
　程無くも飯縄ヶ原に出て見れば、何さま凄まじい大きな原。
一望たゞ茫漠と切り開かれて、今までよ山中をもぐッた目が
俄かに晴いやう。　右を見れば例の名高い飯縄山が雪の中に入
ッて居ました。　飯縄の不動と言ッて音に聞えた山、即ち是に
うと見上げれば山も凛然と故さら威儀を正した風情、一面に
何の木か隙間もなく、而も造化の手ハ過不及なく其梢を揃へ
させて、「評すれば豐富な山。　山の形ハ西角ふ大裾と絞ッて、そ
れで目に立つ山脉も無い事とて屹然として而も三角形に恰好
よく峙ッて居ました。　山の裾からの一回が即ち飯縄ヶ原、旦
れ／＼が過ぎた處ハ大抵山から一里ばかり離れたのみ、それ
で山の威嚴ハ猶是程でした。　携へたのハ双眼鏡、力めても
山の木ハ何の分からぬ、それが頗る遺憾でしたが、さて其遺
憾に附け加へていやな話しと不快とを段々に感しました。
いやな話しとハこの邊よ山犬（狼の一種）の多いといふ事、及
び原の景色がやがて千篇一律になッたことです。
　近來滊車が開けたから猛獸ゞ類ハ皆其響きに怯ぢ、深山へ
逃げ込んで、其ため從來あまり猛獸に逢ハなかッた山よも意
外なものが現はれて、この飯縄が原にも折々山犬が出沒せる
とのこと。　われ／＼がこゝに差し掛かッたのハ早や午前八時
や、過ぎた頃で、晝間の事ゆゑ眞逆と思ふ氣もありましたが

まかし半バハ恐いもの見たさの心も交りました。

原と言ッても中々むかしの武藏野なぞのやうでハなく小さな岡が高低して居る平地で、二つバかり湖も有りました。原の土ハ墨のやうな黒土、木らしい木ハ一本も無く、下生の草ハ芝バかり、其外ハ實のつかぬいちご、又ハ名も知れぬ灌木、ぐらゐの物、わるく言へバ草さへ碌なのハ有りませんでした。　土質の惡るさに物も生へぬ、唯荒蕪に歸して居るのハ惜しいものと飛んだ實業家氣取りで呟くのハ吾ながらをかしな話し、いくら歩いても歩いても飯繩山ハやはり右に元の形、原ハやはり形も變ハらず、もう山が鼻について八重十重に、列なる体を見ても名と聞きたくもなく、また聞くものもなく、前後をふり返へれバ一面圓い天に限られた平たい土盤の上に人間ハわれ／＼只三人、肺が破ぶれる計りに人の事を罵しッても空氣の外にハ聞くものも無く、唯々滿足したのハ其のサブライムな事！

此原が戸隱へ旅行をするもの、最も不快な處です。長野から出て足ハ日やいくらか草臥て來た上にまして長い間變化もない處、同件でも無ければ欠伸ハ請合ひです。夏でも人の通行ハ一日何人と言ふ位、十月の初めごろからハ全く雪で埋ッて、それに飯繩おろしの吹雪ハ馬をも埋める計り、人跡ハ全く絶えて、に容易ならぬ所用の有る者の外わづかに飢えた獸類が雪を踏むのみとのことです。いつとか長野から兇賊が脱走して戸隱山に逃げ込んだ時、警官が其跡を追ッて此原と徒歩で越した事が有ッたさうで、雪ハ三尺も積ッて居る內になはぜん／＼降りしきッてやがて戸隱へ行き着いた頃にハ烈寒にこらえて足ハ血がにじんで脹れ上ッたとの事です。

やうやくにして原の果てに當ッてさゝやかな鳥居を認めた時の嬉しさ、其鳥居が即ち戸隱神社のもので、すはや着いたのと躍り立ッて、さて聞けバ、驚く話し、はるか遠くの雲の中で糢糊として居るのが戸隱山との事。まだ／＼一里程ハ遠い事。評すれバ鳥居ハほんの小供だましの藥菓子、一寸氣と賺すだけでしたが、流石に氣ハ勇ミました。ことにハ天の憐れみか、泣き出しかゝッた天氣も亦直ッて雲も稍薄く、折り／＼ハ破れ目から目的の山の中腹と見せた、そこに眸と凝らせバ、さても妙絶佳絶鼠色の巉崖絶壁！

やゝ催はした足の疲れも忘れ果てる計り、既に原をバ後に見て山道を左右に迂回し、山の位置をてゝかしてに見かへて、となる人家二軒バかり有る處に出で、それを見過ぐせハ一軒の休息所。直に入ッて憩ふ間に、無殘、亂雲が其處此處に湧いて日影も忽ちかくれ、ねバるやうな雨が降り出しました。

亭主ハ世辭のいゝ、小利口らしい男、而もこゝハ戸隱登山の者のために力餅と賣る處とて頻りに之をすゝめ、それでも黨心に白砂糖をふりかけて出しました。　今までの道の寂莫に引き更へて意外なのハこゝの茶店に糸莚連中が同じく旅にそろひて二十人餘も居たことで、開けバ是ハ飯山（信濃の北隅）雪の名所最寄の農家のもの、近頃の降り續きに晴れを山神に祈るための登山との趣き、いづれも力餅の馳走に大口を開いて口中ハ丸で眞白。がや／＼わや／＼目を眠れバ繁華な土地へ出た心持ちもする程でした。

これ／＼が腰とかけた處ハ向ッて左の庭めいた處で、屹然と其前に當ッて峙つのハ全く石質の大盤石、千年の苔蒸して谷水のしたゝりが膩を絶やさず、名も知れぬ異草が生へて居ました。はや空氣の温度ハ冷か。思へバ今日ハ盆の十六日、都下の此頃の暑さと比較すれバ猶冷かと言ふ中に言ひ盡されぬ凄味が山の常として身に染ミました。この雨ハ霽れるかと亭主に聞けバ、いつかと晴れるだらうとの言葉。戸隱ハ餘處が降らぬ時でも降るも珍らしく無いとの澄した答へ、聞いても聞かぬでも同じ話しでした。

雨ハ無論覺悟の事、いざとバかり立ち出れバさア此度ハ飽き／＼する道、それからハ山までハ一町毎に町數が記して一里半（？）と石杭の立ッてゐましたが、其間ハ左右いづれも木立バかり。山も見えなければ雨ハびしよつく、道ハ漸く一間位、中に一筋おのづから石段を刻んだやうに牛の跡が蛇腹についてゐました。石ハなし、道ハ赤土、うッかりすれバ辷るあぶなさ、すでにわれ／＼三人が實際之と經驗しました。　左右の林ハ何處まで奧があるのか、大木に小木、灌木に下草、土目になれて生ひ茂ッて蛇がゐるやら蝮がゐるやら、ことに目につくのハ樺の木とまた雷火に燃えた大木でした。伊香保から掛けて上州の山にも落雷した木が多いとはり、この邊にも落雷ハ凄まじい事と見えました。

談笑の中に向ふにあたッて見える一簇の縦の木立、其横にたゞりくのは待ちに待ッた戸隱の山里でした。折から雨も晴れて雲も少なく、漏れる戸隱山の絶頂と仰げバ岩石の樣もやゝ詳らか、谷間な一点見える白いもの、瀧が河かと許したのも當推量、よく見定めれバ矢張り雪でした。　いつか縦の木立に入れバ山ハもう何處へ行ッたか分からず、日影も殘らぬ木下闇、まづ異常なのハ身に感ずる山氣でした。　縦ハ木立でこそあれ、猛然として雪と突くいかめしさ、山に入るに從ッて山だけの形容が段々ついて來ました。　時計と見れバやゝ午前十一時。

（未完）